

Title	『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の改作過程：作品構成の改編作業に注目して
Sub Title	Die Neustrukturierung von der ersten zur zweiten Fassung des Romans Wilhelm Meisters Wanderjahre
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2023
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.125, (2023. 12) ,p.44 (141)- 65 (120)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	香田芳樹教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01250001-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の改作過程

— 作品構成の改編作業に注目して —¹

山本 賀代

はじめに

私はもう1ヶ月以上、家から、いやほとんど部屋から出ていません。復活祭にはあなたがたのお手元に届く予定の『遍歴時代』の最後の仕上げに追われているのです。気軽な気持ちで作品全体の改作を企てましたが、無責任に終わらせるわけにもいかず、この悪夢を完全に追いやるには、もう1ヶ月、身体に鞭打たなければなりません。(FA 38, S. 77)

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ Johann Wolfgang Goethe (1749-1832年)の最後の長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、あるいは諦念の人々』*Wilhelm Meisters Wanderjahre oder die Entsagenden* (初稿1821年、決定稿1829年。以下『遍歴時代』)は、いくつかのノヴェレをコッタの『婦人手帳』に公表したあと、まず1821年に『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、あるいは諦念の人々 ゲーテの小説 第1部』というタイトルで単独出版された。すぐに第2部が続く予定であったが、すでに準備されていた第2部の執筆は滞り、まもなく中断してしまう。1825年6月の終わり、ゲーテは続編計画を諦め、第1部を完全に解体し、新たな2部構成の『遍歴時代』に取りかかる。エッカーマンが伝えるように、作業は印刷された初版を完全にばらして (のちには筆写させて)、新しい部分を書き加える箇所にあらかじめしるしをつけ (のちには青い紙をはさんで)、書記がその箇所に来たら新しい続きをゲーテが口述する、というやり方で進められた²。この年の12月には第1巻が完成し、リーマーとの見直し段階に入った。1826年1月には第2巻のための基本シェーマが作成され、さらに個別の詳細

なシェーマを作りながら、ゲーテは執筆を続けた。公表は単独ではなく『決定版ゲーテ全集』の目玉のひとつにすることが決まり、ゲーテは2月に出た全集の広告文に「元の作品を完全に解体し、新しく組み立て直すことが著者にはとても楽しく、その結果、まったく違った姿でもう一度、この作品をお目にかけることになりそうです」(FA 22, S. 759)と書いている。もっともこうした作業で仕事が進んだのは決定稿第1巻第9章あたりまでで、第1巻の主な作業時期にあたる1825年内のことであった³。その後の作業はますます複雑になっていったが、それでも1827年5月には第2巻が綴じられ、6月より第1巻と同様にリーマーとの読み直し作業の段階に入った。ところが公表場所である全集の編集事情により、1828年2月、『遍歴時代』は3分冊で全集に組みこまれることが決定する。以降、小説を2部構成から3部構成へと改編する作業が始まり、晩夏から翌年2月にかけての集中的な作業を経て、1829年、3部構成となった『遍歴時代』が『決定版ゲーテ全集』の第21-23巻として刊行された⁴。

冒頭の引用は、気のおけない友人カール・フリードリヒ・ツェルターに宛てた1829年1月2日の書簡のなかで、最後の作業に追われたゲーテが発した悲鳴である。2部構成から3部構成への改編は単純な作業では済まなかった。改編決定から1年という時間があつたように見えるが、1828年6月14日にカール・アウグストが逝去し、ゲーテは夏のあいだドルンブルクに引きこもってしまった。そのため実際の作業は1828年晩夏から年末年始の短期間に集中的に行われた。しかもこの段階でいくつもの重要な変更や追加が行われており、決定稿は一旦完成していた2部構成の『遍歴時代』から大きく姿を変えたはずである。しかし初稿と決定稿の比較研究も十分とは言えない『遍歴時代』研究において、改作過程を厳密に再構成する作業は手つかずの状態である。本稿では、改作過程で作品全体の構成が大きく変化した時期、つまり初稿を解体することが決まった改作開始当初および2部構成から3部構成への改編作業に注目し、残された不採用原稿と構想メモをもとに、古い要素と新しい要素を再構成する改作作業の困難をゲーテがどのように克服していったのか、その一端を跡づけてみたい。

1

まず改作の前提となる1821年に出版された『遍歴時代』を概観しておく。初

稿は全18章構成で、ほとんどの要素が決定稿に引き継がれており、完全に削除されたエピソードはわずかである。もちろん改作の過程で修正されたり変形している部分も多く、配置の変更もかなり生じている。決定稿で分量はほぼ2倍に膨らむが、挿入されているノヴェレの多くはすでに初稿に含まれおり⁵、大部分は枠の世界の拡大と言える。

初稿のストーリー展開は以下のとおりである。『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795-96年、以下『修業時代』）の結末で結ばれたナターリエから引き離され、遍歴を強いられたヴィルヘルムは、二人の関係の理想像を見るように、「聖ヨゼフ2世」の生活を垣間見る（第1-4章）。次に、今ではモンターンと名乗る『修業時代』以来のヤルノーと再会し、息子フェーリクスを専門の教育施設に預けるよう勧められる（第5-6章）。第7章から第8章前半で、偶然に大地主家族（伯父の家族）と知りあい、家を飛びだしたままの甥レナルドーの説得を依頼される。第8章後半では、今度はレナルドーからナホディーネという女性探しを依頼される（このあたりがノヴェレ「くるみ色の少女」）。レナルドーの紹介で収集家の元を訪れたヴィルヘルムは、少女探しのヒントと教育州への紹介状を獲得する（第9章）。第10章から第11章前半は教育州の描写に当てられ、フェーリクスを施設に預けたヴィルヘルムは、第11章後半でくるみ色の少女探しのミッションを完了する。このことは直接ではなくヴィルヘルムに宛てたヘルジーリエの手紙によって暗示され、この手紙にはノヴェレ「50歳の男」の前半部分が同封されている。続く第12章は『修業時代』の薄幸の少女ミニョンの故郷マジョーレ湖の場面となる。若い画家を道連れとしたヴィルヘルムは、この美しく感傷的な場所で「50歳の男」に登場する魅力的な女性二人と出会い、3日以上同じ場所に留まってはならないという遍歴の掟をかいぐり、楽しい日々を過ごすことになる。この描写自体は決定稿にもそのまま引き継がれているが、初稿では、この女性たちの行き先がヘルジーリエの先ほどの手紙によってあらかじめヴィルヘルムに知らされており、彼が彼女たちとの別れに耐えられるかどうか試練が課される構図になっている。この試練を乗り越えたヴィルヘルムはちょうど1年後、第13章で再び教育州を訪問し、モンターンと2度目の再会を果たす。

この章の最後は、ヴィルヘルムの遍歴のクライマックスともいえるエピソードで締めくくられている。第1章でヴィルヘルムはある山の山頂から、これからますます遠ざかるナターリエに名残おしく手紙を書いていた。今、第13章では、

ちょうど同じようにヴィルヘルムは山の頂きに登り、恐ろしい谷底を挟んで向こう側に見える急斜面のやはり山頂に、恋しいナターリエの姿を発見する。望遠鏡でのぞいた恋人の姿は手を伸ばせば届くほどに間近に迫り、ヴィルヘルムは我を失ない、危うく山から転落しそうになったという。このエピソードは残されたヴィルヘルムの手記として語り手によって紹介され、ヴィルヘルムが最後の危機を乗り越え、今や一人前の諦念者となって新たな人生に踏み出すことを暗示している。語り手にメールヒェンと評されるこのエピソードは決定稿からは削除されてしまうが、改作過程のある段階まで残されていたことを、このあとの考察で確認する。

次に第14章でヴィルヘルムは遍歴組合の人々と出会い、ここでレナルドーそして『修業時代』以来のフリードリヒと再会する。諦念者たちの集団である遍歴組合の活動を見守りながら、ヴィルヘルムと読者は第15章から第17章にかけてひとつずつノヴェレを楽しむ。第18章ではレナルドーが集会で、ひとつの土地に縛られず広い世界に散らばろうと呼びかけ、彼の遍歴を讃える演説で第1部は幕を閉じる。

決定稿に比べると初稿のストーリーは直線的で作品構造もわかりやすい。第13章と第14章のあいだに構造の節目を見ることができるだろう。前半で、ナターリエから遠ざけられ諦念を強いられたヴィルヘルムは多様な人間と出会い、与えられた課題をこなしながら遍歴を続ける。そのあいだ、彼は自ら経験したことをひたすら愛するナターリエのために記録し送り続けている。彼は「聖ヨゼフ2世」、「くるみ色の少女」そして「50歳の男」の当事者たちと直接交流し、これらの人物たちもまた、それぞれに情熱を抱え、諦念という課題に向きあっており、枠組みの世界とノヴェレの世界は同じ地平に置かれている。前半はナターリエのヴィジョンという最大の危険を乗り越えたヴィルヘルムの手記で終わり、彼がいよいよ真の諦念者として本格的に人生に参加することが予感される。第14章からの後半は、ヴィルヘルムが遍歴組合と過ごす3日間が描かれる。確固とした諦念者たちの活動を枠組みに、ノヴェレ「新メルジーンネ」「気のふれたさすらいの女」「裏切り者はどこに」⁶が挿入されるが、枠の世界とノヴェレの世界は完全に切り離されており、前半とは明らかなコントラストが築かれている。

『遍歴時代』の改作過程を考察するにあたり、主としてヴァイマル版『ゲーテ全集』第1部第25巻第2分冊に収められた資料と解説を利用する⁷。決定稿の『遍歴時代』には印刷用原稿Hに先だつさまざまな段階の規模もさまざまな草稿が残されているが、これらには174の番号が振られ、異同や草稿の状態を確認することができる。同書にはさらに改作過程で作成された73の構想メモ（シェーマ）と4つの補遺が収められている⁸。構想メモは、小説全体あるいは各部の章だての見取り図として作成された基本シェーマと、各章やさらに細かいシーンのための個別シェーマに大別することができる。

まず、改作過程の要所で作成され、作業の大きな流れを読みとることのできる5つの基本シェーマを紹介しておく。本格的な改作作業の開始を告げる1825年6月28日の日記には、『『遍歴時代』を2つに分け、まだ印刷されていない下原稿を整理する作業。[……] 食後も朝の仕事の続き』⁹とあり、6月30日にもシェーマ作りの記載がある¹⁰。これに対応するのがいずれもゲーテ自筆の基本シェーマI（WA Par. 4）¹¹と基本シェーマII（WA Par. 1）である。前者でゲーテは第1巻と第2巻の分かれ目を決定し、新しい要素をどこに差しこむかを検討している。後者は基本シェーマIをもとに第1巻、第2巻の詳細な章だてを書きだしたものである。その後（1825年夏¹²）、ゲーテは書記ヨーンに基本シェーマIIの写しをとらせ、この写しをもとに第2部の構想を吟味しつつ、第1部の執筆を進めていった。このメモには作業過程（次の基本シェーマが作成される1826年1月ごろまで）でゲーテ自身が追加した2段階の修正（まず第2部、次に第1部を修正している）も確認できる。これが基本シェーマIII（WA Par. 2）である。次の基本シェーマIV（WA Par. 3）は基本シェーマIIIをもとに第2部だけを取りあげたもので、ヨーンに筆記させたあと、ゲーテは4段階の修正を加えた。1826年1月22日の日記（『『遍歴時代』の第2部のためのシェーマに手を加えた』¹³がその作業のひとつと考えられる。第1部はほぼ完成し、詳細な個別シェーマを作成しながら作業は第2部の執筆に集中していく。最後の基本シェーマV（WA Par. 55）は第3部（最後の数章分はない）に特化したもので、ヨーンが筆記したあと、ゲーテの修正・追加があり、作成時期は1828年春（3部構成を決定した時期）あるいは晩夏（9月にドルンブルクから戻り、作業が再開した時期）と推定される¹⁴。

では基本シエーマIに焦点をしばり、改作作業開始当初のゲーテの計画を再現してみよう。

第1巻	第2巻
S. 295 ヘルジーリエからヴィルヘルムへ くるみ色の少女の送付。 それに続きナターリエの50歳の男の芸術家に宛てた通知。 次の段階に進む最終モチーフを見つけること。	295 ナターリエの手紙 誓約からの解放の報告。
333 望遠鏡なしの山での幻像。 [元は第2巻に書かれていたものを移動]	331 地質学の目標。原始学？ [元は「別のモチーフ」とあった] 333 望遠鏡なしの山での幻像
	338 組合
	413 最後に音楽 それから危険な賭け。
	414 別の移行 「度を超えるな」 いくつかの移行
	420 気のふれたさすらい女 裏切り者はどこにいる。
	532 最終章の前に救出された男。 ¹⁵

数字は1821年版のページ数である。どちらの巻にも最初に記されている295ページとは初稿の第13章、2度目の教育州訪問の冒頭ページにあたる。つまり初版のマジョーレ湖（第12章）と2度目の教育州訪問（第13章）が2部構成の分かれ目選ばれたことがわかる。ただし新しい第1巻はマジョーレ湖の場面で終わるのではなく、さらに3つの新要素が追加され、第2巻の冒頭にも新しい要素が2つ追加されたあと、2度目の教育州訪問が始まる計画であったと考えられる。

第1巻の終わりに追加された新要素とは(1)「ヘルジーリエからヴィルヘルムへ くるみ色の少女の送付」、(2)「それに続きナターリエの50歳の男の芸術家に宛てた通知」、そして(3)「次の段階に進む最終モチーフを見つけること」。(1)は「くるみ色の少女」の後半、つまり「レナルドーの日記」の前半を指すと思われる、「50歳の男」と同様、ヘルジーリエからヴィルヘルムに送らせるつもりであ

ったことがわかる。(2)はマジョーレ湖で旅の道連れとなった芸術家に関するもので¹⁶、彼はヴィルヘルムと別れたあと、風景画を携えナターリエのもとに向かい、諦念の人々に親切に迎えられる。決定稿ではその後、芸術家の再登場はないが、元々の計画は異なっていたようだ¹⁷。(3)の記述は、ヴィルヘルムが第2巻で人生の次の段階に進むことを示すような、第1巻の結末のモチーフを見つける必要があるというゲーテのメモだと思われる。そしてそのエピソードは即座に見つかった。次の「333 望遠鏡なしの山での幻像」は、まずは初版のページ順どおり第2巻の331と338のあいだに書かれていたが、ゲーテはそれを消して、第1巻を締めくくり第2巻を再開するための要素に選んだのである¹⁸。333ページとは山頂でのヴィルヘルムとナターリエの不思議な再会シーンである。第2巻ではそれに代わる「別のモチーフ」(決定稿の地球生成議論の原型だろう)もすでに検討されている。

第2巻に追加された新要素のうち、2度目の教育州訪問に先だって第2巻冒頭に置かれたのは「ナターリエの手紙」と「誓約からの解放の報告」である。つまり移動された山頂のシーンで、ヴィルヘルムが人生の新たな段階に向かう決意を固め、ナターリエに伝えることが暗示されて第1巻は終わる。そして第2巻は、ヴィルヘルムの決意を承認したナターリエおよび結社の人々によって彼が遍歴の掟を解かれ、数年が経過した時点から始まる。このような流れのなかで、山頂での望遠鏡の使用に対する倫理的批判のくぐりや削除されたのだろう¹⁹。

基本シェーマIを拡大し小説全体の具体的な章だてを試みた基本シェーマIIでは実際に、マジョーレ湖の章のあとで3つの章が第1巻の終わりを構成している²⁰。順序は入れ替わり、第17章に山頂のシーン、第18章に「くるみ色の少女(2)」、そして最終章は解読困難²¹とされているが、傷心の芸術家に関連する章に違いない。第1巻を締めくくる3つの章は、愛する人との距離を克服し諦念者として歩みだすヴィルヘルム、そしてまだ情熱をかかえながら諦念に向かう途上の二人の若者たちに当てられる予定だったのだろう。基本シェーマIIIでは第1巻最終章は山頂の場面に確定し、レナルドーの日記は挿入先に迷い、芸術家の章は消えてしまう²²。

続いて基本シェーマIにもどり、第2巻に追加された残りの新要素に目を向ける。初版の414はフリードリヒが塔の結社の活動についてヴィルヘルムと歓談する場面の冒頭ページだが、413(414の前に追加するという意味だろう)にノヴ

エレ「危険な賭け」、そして414周辺を書き直し、ノヴェレ「度を越えるな」を追加しようとしている。最後の532は初版の最終章、レナルドーの演説の冒頭ページであるが、「最終章の前に救出された男」とある。

この「救出された男」とは誰のことだろう。まず思い浮かぶのは、決定稿第3巻第18章、ヴィルヘルムが溺れたフェーリクスを救い外科医としての力を発揮する小説の最終場面である。そこでこの場面の不採用原稿（WA Nr. 174）を確認する。ゲーテの自筆で、裏に書かれた別の文書には1826年1月10日の日付があり²³、およその成立時期が推定できる。第2巻の新要素としてはかなり初期に執筆されている。救出された男はヴィルヘルムのマント²⁴の上に寝かしつけられ、人々は彼が目覚めたらすぐに元の姿に戻してやろうと、男の服を乾かしていた。決定稿ではここで小説は終わるが、不採用原稿は次のように続いていた。

手紙入れを彼らは開き、砂利のついた手紙** [単語の終わりは判読不能]を風で乾かした。するとヴィルヘルムの視線は目のまえにある何通かの手紙に落ちた。

そのとき彼に天国のような光景が現れた。彼はナターリエの筆跡、自分宛てのものと同じような1通の手紙を見た。それは彼もその内容をよく知る写しだった。彼はその手紙を開くことなく、胸に押しつけた。²⁵

このナターリエの手紙とは何のことだろう。基本シェーマIIには、第2巻最終章のひとつ前の章に「助けられた男 ナターリエの推薦状 写し」そして「見いだされた人生の目標」²⁶と記されている。基本シェーマIII、IVでは同じ内容のまま最終章に移動している²⁷。基本シェーマIVにはさらに「上との関連」²⁸と追加される。一方で基本シェーマIで第2巻冒頭に置かれた「ナターリエの手紙」と「誓約からの解放」は、基本シェーマIIの第2巻第1章で「ナターリエからヴィルヘルムへ 誓約からの解放 50歳の男 (2) 推薦された青年」²⁹と拡大し、基本シェーマIIIに引き継がれる³⁰。基本シェーマIVでゲーテは第2巻第1章を「ナターリエからヴィルヘルムへ 3日間の誓約からの解放 推薦された青年」³¹とし、「50歳の男」(2)を独立させ、一旦、第2章としたあと、さらに第3章に変更し、第2章には「時間の利用 外科」を追加している³²。「上との関連」とはこれを指すのだろう。遍歴者の掟から解放されたヴィルヘルムは外科医を人生の目的と定

め、数年を専門教育に利用した。そして小説の最後にその力を発揮する——ナターリエの推薦状をもつ青年の命を救うことによって。

推薦状を持つ青年とはマジョーレ湖で知りあった画家に違いない。彼はヒラーリエに去られ心に傷を負ったままナターリエのもとに向かい、彼女のもとで癒され励まされた。先に見たとおり、基本シェーマI、IIで第1巻の終わりに構想されていた芸術家の章は消えてしまったが、第2巻第1章のナターリエからの報告で、青年が彼女からの推薦状を持って、諦念者の人々のもとに送りだされたことが報告される計画だったのではないか。この計画は基本シェーマIVまで残っている。決定稿の結末は父と息子の再会で幕を閉じるが、元々は第1巻の山頂シーンと同様、ナターリエとヴィルヘルムの絆を示す精神的な再会が準備されていたのである。

終わりだけではない。そもそも物語の始まり、第1巻第1章でヴィルヘルムは名残おしく山頂からナターリエに手紙を書いている。第1巻の最終章に再び山頂のシーンが用意され、新しい人生に踏み出すヴィルヘルムの力強い決意が、ナターリエとの絆を示すメルヒェン風の再会エピソードに託された。数年後から始まる第2巻第1章では、ナターリエにあと押しされて、ヴィルヘルムは新しい人生の段階に入っていることが報告される。そして第2巻の最終章でヴィルヘルムが外科医としての力を発揮し、彼の人生の目的が明らかにされるとき、彼の心にはナターリエの姿がよみがえるのである。

このように、改作作業の始まりにおいてゲーテが小説の枠組みにすえたのはヴィルヘルムとナターリエの結びつきであり、ヴィルヘルムの人生にはいつもナターリエの姿が寄り添うことになっていた。この方針は基本シェーマIIIからIVにも引き継がれ、1827年6月に完成した2部構成の『遍歴時代』では、ナターリエの存在が決定稿からは想像できないほど大きかったと考えられる。しかし決定稿では、第1巻第1章を除いて、紹介したナターリエのエピソードはすべて削除されてしまうばかりか、彼女は物語の途中でヴィルヘルムを置いて兄とともにアメリカに渡ってしまう。改作過程の最終段階、2部構成から3部構成への改編の過程で、どのような方針の転換が起こったのだろうか。

3

ここで私たちは、読者に中休みをはさむこと、しかも数年にわたる中休み

をはさむことをお伝えしなければならない。それゆえ印刷の都合がつけば、喜んでこの場所で巻を閉じていただろう。(FA 10, S. 515)

決定稿第2巻第7章の終わりに挿入された「中間の言葉」で、作者ゲーテに限りなく近い語り手は、作品内に入りこんだ空白の数年間（ヴィルヘルムの専門教育期間）は改編作業による不本意な結果であったと告白している。どこで作品を分割するかという形式的な動機から改編作業が始まったとすれば、真っ先に検討されるのは新しい分かれ目をどこにするか、そしてこれまでの分かれ目がなくなることの是非であろう。決定稿からわかるように、ゲーテは2部構成段階の分かれ目を連続させることを避けただけでなく、そもそも第1巻の終わりの山頂シーンも第2巻の始まりのナターリエの手紙も削除してしまった。もっとも改作当初から重視されてきた二人の絆が簡単に切り捨てられたわけではなく、まずは3部構成のなかでより効果的な形と場所が模索されたようである。その結果が決定稿第2巻最終章として新たに追加されたナターリエに宛てたヴィルヘルムの手紙である。

この手紙でヴィルヘルムは自分が外科医を志すことになった原体験として、友人を水の事故で失くした少年時代の経験をナターリエに告白する。ヴァイマル版にはこの手紙に関する資料は収められていないが、同書刊行後にひとつの構想メモ（以下、シェーマF）が発見され、1926年にライプツィヒで出版された『ゲーテ全集』（Festausgabe）³³で初公表された。それはゲーテの鉛筆書きによるメモで、紙の裏には1828年11月24日の日付がある。ここでゲーテは、ヴィルヘルムの専門教育に関連するモチーフを作品の各所に織りこもうとしている。

- 1 炭焼きのもとで暗示 モンターンが希望を抱かせる
- 2 手紙 レナルドーと馬で移動中 推薦 はっきり明言せず 根拠の説明
- 3 くるみ色の少女のもとからの帰路 画家に手紙を持たせる 返事 中休みの時間
- 4 モンターンと 「何を」は語らずに
- 5 ナターリエに宛てて³⁴

それぞれに注意書きがある。

注1：5番の最後に発覚

注2：盟友たちのもとの活動

注3：返事を受け取る 中休み中の断片

注4：モンターンの合意

注5：最終説明

これらすべてを連携させること³⁵

3番をのぞき、容易に決定稿の関連箇所と対応させることができる。(1) 第1巻第4章で炭焼きのもとで夜を明かすヴィルヘルムとモンターンの会話に、ゲーテは最初の暗示をしのばせた。ヴィルヘルムがふところから小箱（ナターリエとの最初の出会いに関係する医療箱）を取りだしたことから会話が始まり、やがて彼は「自分はもうずっと前からある特別な職業、非常に役だつ手仕事に専念したいと思っている」（FA 10, S. 299）と告白し、遍歴者の誓約の解除を結社の盟友たちに取りなしてほしいと願う。このくだりは草稿H¹⁴に含まれない唯一の箇所、印刷用原稿Hに直接貼りつけられている³⁶。注意書き1番にあるとおり、ゲーテはこのほのめかしが少しずつ展開し、最終的にナターリエ宛て書簡の結末で明らかにされるよう仕組んでいく。

(2) 決定稿第1部第11章で、ヴィルヘルムとレナルドーは別れ際に互いのための推薦状を用意する。結社の盟友に宛てたこの手紙の最後に、ヴィルヘルムはヤルノーと話しあった自身の要件についても書き添える。3番を飛ばし、(4) 決定稿第2巻第9章の山祭りで、ヴィルヘルムはモンターンの再会する。ヴィルヘルムはすでに遍歴者の誓約から解放されたあとで、自分がどのように時間を利用したのかを説明する。「ある重大な出来事が起き、私たちの友〔ヴィルヘルム〕は、彼の身につけた才能を適切に用いることに成功し、人間社会に真に役だつ自己の姿を証明する機会を得た」（FA 10, S. 537）とあるが、具体的内容は伏せられ、「私たちは今のところ、それを公表することは許されていない。もっとも読者はまもなく、まだこの巻を手から離さぬうちに、それについて十分に知らされることになるだろう」（ebd.）という語り手の言葉で章は終わる。この「まだこの巻を手から離さぬうちに」とはもちろん第2巻最終章に決まった新要素、ヴィルヘルムのナターリエ宛て書簡のことを指しており、一連のほのめかしがこの手

紙で一気に解消される。

最後に3番の当初の計画を推測する。(3) レナルドーからの依頼を果たしたヴィルヘルムはいよいよ専門教育に専念する意思を固め、マジョーレ湖で一緒になった画家に手紙を持たせる。内容は遍歴者の誓約からの解放の請願とその理由、宛先はナターリエ、そして彼女を通じて結社からの許可の返事が届く。専門教育のための時間が経過する——2部構成段階の第1巻の終わりから第2巻の始まりの流れが、この3番の箇所に凝縮されているのである。このとき、幻想的な山頂でのナターリエとの再会シーンは失われた。小説の前半から外科医という明確な目標に向かうヴィルヘルムの人生には、情熱の克服を象徴するエピソードはもはや意味を持たないからである。新たに取りあげられたナターリエとの出会いに遡る医療箱は、それに代わって二人の神秘的な関係性をほのめかしはするが、ヴィルヘルムの語りは淡々としたもので、二人の絆が情熱的に語られることはない。

このように、ゲーテは外科医を目指すヴィルヘルムのモチーフの諸要素を小説内にちりばめ、新しい第2巻の終わりでそれらが一本の糸に繋がるような構成を目指した。第3巻の要素（ヴィルヘルムが学んだ造形解剖学や外科医としての力を発揮する小説最終場面）について何も触れられていないことは、ゲーテの関心が新しい第2巻の終わりに集中していたことを物語っている。このシェーマFには章番号も振られていないため、3部構成の枠組みが確定する前にゲーテが第2巻の終わり方を模索して作成した可能性が高く、ヴィルヘルムのナターリエ宛て書簡によって改編作業は大きく前進したと推測できる³⁷。

4

ではシェーマFの3番は決定稿でどのような形になったのか。関連するのは第2巻第6章と第7章である。第6章はくるみ色の少女のもとからの帰路に発送されたヴィルヘルムの2通の手紙だけで構成されている。まずヴィルヘルムはレナルドーに娘が幸せな状況で見つかったことを報告し、安心して大切な仕事に専念してほしいと嘆願する。2通目は塔の結社の中心的人物で『修業時代』以来のアベに宛てたもので、ヴィルヘルムはレナルドーのことを頼むとともに、シェーマFの1番と関連させながら自分自身の計画の説明と誓約解除を願いでる。

私自身のことについては、たえず行動によって自身を反省した結果、モンターンを通じて以前に提出したお願いをこれからもさらに真剣にくり返すことができます。私の遍歴時代をより落ち着いて確実に完成させたいという希望が、ますます切実になっているのです。私の考えを容れてくださるのはまちがいないとの希望を抱いて、私はすっかり用意を済ませ、手はずを整えました。私の大切な友人のための用事を済ませたあと、今話題にしている条件のもとで、私はこれからの人生行路を悠然と踏みだすことができるでしょう。もうひとつの敬虔な巡礼を済ませたのち、私はすぐに**に行こうと考えています。この地で手紙をいただき、そして私の内的衝動にしたがって新たな人生を開始したいと希望しております。(FA 10, S. 496)

第7章は初稿と異同のないマジョーレ湖の場面となるが、冒頭のくだりに修正があるほか、マジョーレ湖の場面続き、レナルドーとアベからのヴィルヘルムに宛てられた2通の返信と「中間の言葉」が新たに追加されている。レナルドーの返信には、大きな仕事に専念している今、自分にはくるみ色の少女のことを考える余裕はないと完結に記されている。一方、アベの返信にはたくさんの要素が盛りこまれているが、そのひとつとして、ヴィルヘルムの誓約はすでに解除されていることが告げられるのである。第7章の最後に置かれた「中間の言葉」は、すでに紹介したとおり、小説構成の不備を弁解するもので、数行で数年の時間を越え、第8章は2度目の教育州訪問となる。このように、ヴィルヘルムが専門教育に入るために必要とした遍歴者の誓約解除は、芸術家を介したナターリエとのやりとりではなく結社との直接交渉に形を変え、またしてもナターリエとの繋がりが薄れることになった。

元々あったマジョーレ湖の場面をはさんで新たに配置された4通の手紙には10の構想メモ(WA Par. 41-50)が作成され、「中間の言葉」には不採用原稿も残されている。ナターリエの役割をアベに引き継がせるだけならば、これほど複雑な作業は必要なかっただろう。修正が拡大した理由には、第2巻に残されていた解決すべき別の要因が絡んでいたと思われる。それはノヴェレ「50歳の男」の導入の仕方の変更である。初稿ではこの物語はまだ前半部しかなかった。ヘルジーリエのヴィルヘルム宛て書簡と同封され、後半部はヴィルヘルムによって書かれナターリエに届けられることが予告されていた。改作過程の基本シエーマでも前

半部の扱いに変更はなく、後半部については基本シエーマⅢまでは第2巻第1章に、基本シエーマⅣでは第2巻第3章に挿入されることになっていた。しかし決定稿では物語は分断されず、一連の物語として第2巻第3章から第5章に挿入される。導入の仕方も変更され、ヘルジーリエの手紙は消え、作者に限りなく近い語り手の短い序文が添えられた。この序文の下書き（WA Nr. 60）をゲーテが1828年12月22日の劇場チラシの裏に書いていることから³⁸、このノヴェレの扱い方が確定したのはかなり遅いことがわかる。また印刷用原稿Hに振られたページ数の痕跡から、2部構成の段階では、ヘルジーリエの手紙による前半部導入という初版の形が残されていたことも確認できる³⁹。

しかし一方で、ノヴェレを導入するヘルジーリエの手紙には修正すべき点があると、ゲーテは早くから気になっていたに違いない。この手紙に関するものと思われる1827年1月26日付けの個別シエーマ（WA Par. 30）の前半部には、「ヘルジーリエからヴィルヘルムへ。始まりはそのまま 線を引いたところは変更される。終わりはそのまま しかし全体はいくらか違った風に扱われる」⁴⁰と記されている。初稿にあるこの手紙の前半には、ヴィルヘルムに対するヘルジーリエの苦情が綴られている。ヴィルヘルムはくるみ色の少女を発見し、彼女が幸せであることを伝えてきたが、詳しい情報を教えないのはひどい、レナルドーもそれではがまんできない、というのである。

彼女は順調だとレナルドーに断言して、あなたは彼をなだめすかすおつもりです。確かに彼は言いました、そのときは安心すると、ほとんど誓いました。でもあの情熱的な男は他の人や自分に対して何も誓いはしないのです！ ですから、これでは事はちっとも片づいてはいないのです [……] (FA 10, S. 104)

実際に初稿のレナルドーはヴィルヘルムの報告に満足できず、彼女の居場所を自分で探しまわったことを第17章で告白する。改作の途中段階までは同じ設定でレナルドーの日記は導入されていた⁴¹。しかし決定稿のレナルドーはヴィルヘルムの報告で満足し、結社の仲間とともに大事業に専念する諦念者として描かれる。線を引かれたのはレナルドーに関するくだりであったと推測できる。しかし実際にヘルジーリエの手紙が書きかえられた痕跡は見当たらず、古い原稿がその

まま残されていた。改作作業も大詰めの段階で、ヘルジーリエの手紙が使えないことを思いだしたゲーテは、ヴィルヘルムがくるみ色の少女を発見したことをレナルドーに直接伝える手紙を挿入することに決めた。

ヴィルヘルムのレナルドー宛て書簡には4つの構想メモが残されているが、最初のシェーマは自筆のWA Par. 42だと思われる。メモの冒頭には「第2巻第6章 ヴィルヘルムからレナルドーへ」⁴²と記されており、「50歳の男」が連続して挿入されることはすでに決まっている。この紙の裏面は第2巻第7章冒頭のゲーテ自筆の草稿WA Nr. 91で、同時期に作業されたと思われる。初稿のマジョーレ湖の章の冒頭にはヘルジーリエの手紙に関連するくだりが含まれるので、この箇所の修正も必要だったのである。書き直された冒頭は、「私たちの友 [ヴィルヘルム] は上述の手紙を発送してから、隣接するいくつもの山々を越えて [……]」(FA 10, S. 496) と始まる。この「上述の手紙」が同じ紙で構想されたヴィルヘルムのレナルドー宛て書簡である。この時点でゲーテは「手紙」を単数形で書いていたと思われ⁴³、アベ宛ての書簡はまだ想定されていないことがわかる。さらに次に紹介する自筆草稿も同じ流れで書かれたものと思われる。マジョーレ湖の次の章、つまり2度目の教育州の冒頭部分である。

上でお伝えしたヴィルヘルムのレナルドー宛て書簡を通じて、私たちは、彼の計画がうまくいき探していた女性を見つけ、しかも望むべき状況で出会ったことを知った。これにより彼はさらにきっぱりと大切な友に対して、これ以上探索したり探そうとせず、これまでの非常に恵まれた導きを信じ、将来も、立派な自身を天意に委ねるように、彼自身の守護神そして適した環境に委ねるように、二重にも三重にもお願いすることになった。⁴⁴

このように、4通の手紙のうちレナルドーに宛てたヴィルヘルムの手紙は他の手紙に先だって計画されていたに違いない⁴⁵。そこにヴィルヘルムの専門教育モチーフをばらまく構想が加わったのである。直前に引用した2度目の教育州冒頭部分は、次の3段落が追加されてあらためて口述筆記されている。

同時に知ることができたように、レナルドーも今では落ち着き、立派な仲間たちの進行中の計画について友人に報告した。そこで、ミニョンの生地へ

の小さな巡礼のあと、私たちの友は静かにある迅速に踏みだされた人生の道に進むことになる。というのも、彼は理由のある請願にもとづき、ナターリエとその他の大切な仲間たちを通じて、3日以上同じ滞在地に留まってはならないという厳しい条件から解放され、ある重要な場所に留まり、専門教育を受けて高貴な技術を習得する機会を見いだしたのである。これについては、ときが来れば詳細を知ることになるだろう。

どのくらいの期間、彼がこの仕事に専念したのか、私たちは正確に言う必要はないだろう。とにかく、彼はときおり空を観察しながら、少しずつ惑星が近づき、あの教育州の大きな祭りが近づいていることに気づいた。

遍歴者は山を越えたあと、平坦な土地の側面から教育州に入っていく [……]⁴⁶

はっきり書かれているわけではないが、ここでは画家がヴィルヘルムの手紙を持ってナターリエのもとに向かったと考えられ、ナターリエから請願を認める返事を受け取ったヴィルヘルムは数年間の専門教育を経て、今、再び教育州を訪問しようとしている——シェーマFの3番に即した草稿と言えるだろう。

しかし計画は拡大していった。すでに第2段落でヴィルヘルムに対するレナルドーの返信がほのめかされているが、ゲーテはさらにヴィルヘルムとアベとのやりとりを追加することも思いついた。その結果、ゲーテはまずWA Nr. 93の草稿の最初の3段落に削除線を引き、その上に「第12章の以前の中間の言葉」（初稿の「中間の言葉」）、最後の段落には「第9章」と書きこんだのである⁴⁷。レナルドーとくるみ色の少女に関連する話に加え、ヴィルヘルムの誓約問題もすべて手紙のやりとりにするのなら、最初の3段落の語り手による説明は不要となる。古い「中間の言葉」でその埋めあわせを思いつくが、ゲーテはすぐに新たな「中間の言葉」を執筆することにした。最後の段落を「第9章」としていることから、ゲーテの想定する章だては、第6章にヴィルヘルムの2通の手紙、第7章はマジョーレ湖、第8章にヴィルヘルムに宛てた2通の返信と語り手の「中間の言葉」、そして第9章は2度目の教育州であったと考えられる⁴⁸。

残された資料を見ると、アベとのやりとりの追加を思いついた当初、ゲーテはナターリエとのやりとりを完全に消してしまうつもりではなかったようだ。アベに宛てたヴィルヘルムの手紙の構想メモは3つ（WA Par. 46-48）残されている

が、WA Par. 46ではまだモンターンの名前は出ておらず、ナターリエのことが言及されているため、これが最初のシェーマだと思われる。

筆者は自分自身について語る、自分自身を反省し、もはや希望することはより落ち着いて自分の遍歴時代を完成することだけであり、これについて詳しく告白する許可をナターリエから得た、と。⁴⁹

この紙には4通の手紙すべてのシェーマが含まれている。ヴィルヘルムのレナルドー宛て書簡のシェーマ（WA Par. 45）は確認用だろう。ヴィルヘルムへの2通の返信はセットで構想されており（WA Par. 50）、シェーマではなく完全な文章で口述筆記され、最後に1828年11月28日の日付がある。ここでのレナルドーの手紙には、最終的にはアベの手紙に含まれる内容が盛りこまれており、2通の手紙の役割分担がまだできていない。しかもヴィルヘルムの誓約解除に関する内容も含まれていない。

その後、WA Par. 51でゲーテはアベの手紙の役割を精査する。その最後には「ナターリエについての暗示？」⁵⁰と書かれており、ゲーテがナターリエの扱いに悩んでいたことが伺える。結果は、彼女の役割を完全に削除する方針に固まり、ヴィルヘルムからアベに宛てた手紙の内容が再検討される。上で引用した最初の構想メモWA Par. 46に書かれていた「ナターリエから」をゲーテは鉛筆で削除する。そして新たに作成されたのがゲーテ自筆のWA Par. 47とそれを元に口述筆記されたWA Par. 48である。ここでナターリエに代わりモンターンの名前が登場し、ヴィルヘルムはモンターンの通じて伝えてあった請願をこの手紙でくり返すという決定稿の流れが確定した。合わせてアベの手紙に誓約解除を伝えるくんだり⁵¹が追加され、ナターリエのもとには外科医ヴィルヘルムが少年時代を回想する1通の手紙だけが残った。

おわりに

4通の手紙の構想と同時に、ゲーテは小説の本来の切れ目だった箇所に「中間の言葉」を執筆した。不採用となったこの「中間の言葉」には、数年間の空白に対する作者の興味深い計画が残されていた。

しかし歴史的な報告において目につく亀裂を、私たちは個々の考察や見解で埋めあわせようとするものです。注意深い読者は、物語の経過を中断しないように、詳細に挿入することをためらっていた報告や談話について、私たちがあちらこちらで口にしてきたことを思いだされるでしょう。しかし、しばらくの間、気をそらせ、出来事から離れ、自分自身のことに戻っていたことを読者に願う現在では、わきに追いやってきたものをここで導入するのが得策のように思われます。思慮深い人なら、これらの分けられた個々のことがらを考察しつつ、それがどこに置かれるべきものだったのかに気づくでしょうし、今後、その機会を見つけるでしょう。意図されているのは、語られたものをどこかで説明し、意見の多様性を増やし、見解の純粋さを広げることなのです。

しかし読者が、特に初めてこの本を読んでおられ、物語のさらなる続きが知りたくてたまらない場合は、自分の権利を行使して、数ページを飛ばして、すぐに第9章に入って話の続きの糸を再び掴んでください。⁵²

ゲーテは数年間の空白を埋めあわせるため、数ページにわたって「個々の考察や見解」を挿入しようと考えていた。これは決定稿に追加された2つのアフォリズム集「マカーリエのアルヒーフから」「遍歴者たちの心のなかの考察」の原型であり、この発想はページ数の確保という外的要因によって仕方なく『遍歴時代』に入りこんだわけではなかったようだ。3つの巻の分量調整という制約がなければ、この場所にアフォリズム集が挿入されていたのかもしれない。

決定稿の複雑な作品構造は「アルヒーフ小説」として評価されているが、最終的な形からだけではわからない作品の舞台裏がある。初稿から決定稿にいたる改作過程を跡づけることは、ゲーテの晩年のスタイルを考察する上で欠かせない作業だろう⁵³。初稿で重要な役割を担っていたナターリエが決定稿ではほとんど存在感を失うことは、改作の過程でもゲーテのなかでヴィルヘルムが諦念者として成長し続けていたためである。ヴィルヘルムだけではない。初稿では情熱的な部分を残していたレナルドーも、くるみ色の少女のことで取り乱すことのない諦念者に成長していく。一方で、決定稿には新たな情熱家も登場する。ヴィルヘルムの息子フェーリクスである。初稿では教育州に預けられるだけの少年は年齢を

引きあげられ、情熱的に年上女性ヘルジーリエを慕う青年となって登場する。小説の最終場面で確認できたように、芸術家に託される予定だった青年の役割は、決定稿でフェーリクスが担うことになった。諦念に反発する息子フェーリクスの物語が諦念者となった父ヴィルヘルムの人生に併走するように、ゲーテはくり返しシェーマを書き直し、その配置を検討している。何度もシェーマを作り直し、古い部分と新しい部分を解体しては結びつける作業のなかで、80歳を目前にした作家もまた、登場人物たちとともに歳をとり成長していく。ナターリエの痕跡が少しずつ消えていく改作過程には、ゲーテ自身がナターリエを諦念する時間が流れていたとも言えるだろう。不採用となった「中間の言葉」には次のように書かれていた。

人生でも小説でも、時間とは重要な権利を行使するものなのです。私たちはここで登場人物たちに、彼らにも私たちにも役だつ数年を与えましょう。年配のものたちは正気に戻るでしようし、中年のものたちはより力強く、理性的に歩きだすでしよう。若者が、私たちの愚かな行為や、できれば私たちの良い行為に関与できるまでに成長した姿を、私たちは見いだすでしよう。⁵⁴

註

テキスト：Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u.a. Frankfurt am Main 1987-2013[=FA]. 同全集から引用・参照する際はFAの記号とともに巻数とページ数を示す。

- 1 本稿は「ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、あるいは諦念の人々』の成立事情」と題した第235回阪神ドイツ文学会での研究発表（2021年7月17日）の一部をもとに、議論を大幅に修正・発展させたものである。
- 2 エッカーマンとの対話（1827年1月15日）。FA 39, S. 198. エッカーマンは1826年夏の作業としているが、1825年夏の勘違いである。Vgl. FA 10, S. 791.
- 3 この時期に成立したのが、印刷用原稿Hの元になったもつともまとまった草稿H^{II}である。第1巻第1章から第9章までを含み、「ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、第1部、改作、1825年」と表書きされた（記号はFAにならう）。
- 4 『遍歴時代』の成立史をまとめるにあたり、以下の2つのゲーテ全集の注釈を参

照した。FA 10: *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Hg. von Gerhard Neumann u. Hans-Georg Dewitz. Frankfurt am Main 1989, S. 777-794; *Goethes Werke*. Fests Ausgabe. Bd. 12: *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Krit. durchges. von J. Wahle, Einleitung und Erläuterungen von O. Walzel. Leipzig 1926, S. 469-474.

5 決定稿でまったくの初出ノヴェレは「危険な賭け」と「度を超えるな」だけである。
6 決定稿ではタイトルが「裏切り者は誰か」に変更されるが、内容は同一。

7 *Goethes Werke*. Hg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. 143 Bde. Weimar
1887-1919 [=WA], I 25/2. Weimar 1905.

8 同書から草稿を参照する場合はWA Nr. 174、シェーマを参照する場合はWA Par. 73
などと表記する。

9 WA III 10, S. 73.

10 Ebd.

11 WAはこのシェーマの成立時期を勘違いしている。Vgl. FA 10, S. 800.

12 FAによる推定。拠り所のひとつは1825年8月8日の日記（『『遍歴時代』のいくらか
を整えた』）。Vgl. ebd., S. 803.

13 WA III 10, S. 152.

14 Vgl. FA 10, S. 807f.

15 WA I 25/2, S. 214.

16 今後のシェーマのなかで、ゲーテはマジョーレ湖の場面を「50歳の男 (3)」と記し
ている。初稿にはまだないノヴェレの後半部が「50歳の男 (2)」となる。

17 ボアスレー宛て書簡（1821年7月23日）でゲーテは続編での芸術家の再登場を予告
している。FA 36, S. 194.

18 改作作業の初期に利用され、ばらばらに残された初版（WAではE¹と呼ばれる）の
333ページにも「もっと前に移動すること」とのゲーテのメモが残されている。
Vgl. Fests Ausgabe 12, S. 475.

19 望遠鏡批判は決定稿第1巻第10章に新たな場所を見いだす。

20 WA I 25/2, S. 210.

21 Offen.[?]sentiment.[?] (ebd.)

22 Ebd., S. 212.

23 Ebd., S. XXIII.

24 不採用原稿では「ヴィルヘルムのマント」(ebd., S. 206)だったが、決定稿で「父
親のマント」(FA 10, S. 745)に変更されている。この形容詞以外、決定稿にも救出
された男がフェーリクスであることを示す言葉はない。

25 WA I 25/2, S. 206.

26 Ebd., S. 210.

27 Ebd., S. 212; S. 213.

28 Ebd., S. 213.

- 29 Ebd., S. 209.
- 30 Ebd., S. 211.
- 31 Ebd., S. 212.
- 32 Ebd., S. 213.
- 33 注4参照。
- 34 Festausgabe 12, S. 507f.
- 35 Ebd., S. 508.
- 36 WA I 25/2, S. 15 (WA Nr. 11).
- 37 第1巻と第2巻の分かれ目は難しい作業ではなかった。第1巻最終章の最後の数ページを微調整する草稿が残されているのみである。Vgl. ebd., S. 75f.
- 38 Ebd., S. 75.
- 39 Ebd., S. 79ff.
- 40 Ebd., S. 229.
- 41 Ebd., S. 141f. (WA Nr. 127; 128).
- 42 Ebd., S. 247.
- 43 WAにはこの草稿についての注釈がないが、次の段階の印刷用原稿で複数形に修正されていることが記されている。Ebd., S. 107.
- 44 Ebd., S. 117 (WA Nr. 92).
- 45 4通の手紙の成立時期についてFAは本稿とは異なる見解（ヴィルヘルムの2通の手紙の成立はもっと早い）を示している。根拠はヴィルヘルムの手紙のシェーマの数が多いこと、さらにアベに宛てた手紙をどこに置くか模索している（第8章に置こうとしていた）との推測である。しかしレナルド宛てのシェーマが多い理由は、他の手紙やレナルドの日記の作業の際に確認用としてくり返し書かれたため、内容もほとんど同一である（例えばWA Par. 43はアベのヴィルヘルム宛て書簡のシェーマWA Par. 49とともに、草稿WA Nr. 129と同じ紙に書かれている。これらの手紙に関連するレナルドの日記の箇所を執筆する際に、ゲーテはこれらのメモを参照したと考えられる）。アベに宛てた手紙についても、以下で考察するとおり、同じ紙面でアベからの返信も執筆しているものであり、挿入場所を検討していたわけではないだろう。Vgl. FA 10, S. 818.
- 46 WA I 25/2, S. 118 (WA Nr. 93).
- 47 Ebd., S. 118f.
- 48 ヴィルヘルムに宛てたアベの書簡の構想メモのひとつ（WA Par. 49）には第2巻第8章とある。しかし印刷用原稿Hではヴィルヘルム宛ての2通の手紙と「中間の言葉」には独立した章番号が振られないまま、2度目の教育州に第9章が振られ、第2巻の最終章は第12章になっていた。そのため『決定版ゲーテ全集』では第8章が抜けた状態で出版されている。WAは第9章の数字はゲーテの勘違いであると判断し（ebd., S. 116）、2度目の教育州を第8章に修正、第2巻の最終章は第11章とされた。

ほとんどのゲーテ全集がこれになっており、本稿がテキストとするFAも同様である。修正を行っていないゲーテ全集としてはJohann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. München 1985-1998. Bd. 17: *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen*. Hg. von Gonthier-Louis Fink, Gerhart Baumann und Johannes John. München 1991.

49 WA I 25/2, S. 249.

50 Ebd., S. 253.

51 初稿でヴィルヘルムに遍歴者の義務を課していたのはナターリエとされていたが、それも結社に変更された（第1巻第1章のヴィルヘルムのナターリエ宛て書簡）。

52 Ebd., S. 115 (WA Nr. 100). 残された前段階の草稿（WA Nr. 99）には1828年12月30日の日付がある。Ebd., S. XVIII.

53 同じ問題意識からの考察として、拙稿「若返りと老いの物語——ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテの『50歳の男』」（磯崎康太郎、香田芳樹編著『晩年のスタイル——老いを書く、老いて書く』松籟社 2020年所収）69-95ページ。

54 WA I 25/2, S. 115.